

# 読書推進教育における図書館および書店との協働

—流通科学大学初年次科目「文章表現Ⅱ」の取り組み—

Reading Promotion Activities through Collaboration  
among Faculty, University Library and Bookstore

橋本 信子\*

Nobuko Hashimoto

初年次教育科目「文章表現Ⅱ」では、知的好奇心を引き出し、他者との知的交流の機会を得ることによって受講生の学習意欲を喚起し、読み書き伝える力を向上させる授業を展開した。この実践を可能にしたのは、読書推進を目的とする図書館および地域の書店との協働である。この取り組みによって学生協働による授業づくりへと展開する可能性も芽生えてきている。

キーワード : 読書推進、協働、アクティブラーニング、文章表現、初年次教育

## はじめに —実践の背景と目的—

本稿は、2015～16年度に流通科学大学（以下、本学）の初年次教育科目「文章表現Ⅱ」において実践した図書館との教職協働および地域書店との協働による授業づくりについて報告し、文章表現科目において学内外のアクターと協働する意義と成果について考察するものである。

筆者はこれまで担当したアカデミック・ライティング科目の実践を通じて、学生が書ける課題、書こうとする課題の条件を見いだした。その条件とは、①関心を持てる課題を構想段階からていねいに指導すること、②書く必要性のある課題を設定すること、③他者に読まれることを意識して書くような場を設定すること、④やりがいを感じる程よい難易度を設定することである<sup>1)</sup>。

また、授業を教員—学生間、学生—学生間の知的交流の場とすることが学習者の能動的な学習態度を喚起すること、そして学習スキルを向上することにもつながることを論じた<sup>2)</sup>。

さらに、学生のそれぞれの知的好奇心を引き出しながらアカデミック・スキルを習得させる具体的な方法として、図書館が所蔵する信頼性の高い多彩な資料に触れる授業を図書館と協働して開発し、その有効性を確認した<sup>3)</sup>。

2016年度には、新たな知的交流の機会、知的好奇心を引き出す機会をつくるべく、地域の書店との協働による授業を行った。さらには、学生有志が授業実践を学内外に発表する機会を作った。

---

\*流通科学大学商学部，〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

その結果、学生が授業づくりの協働相手として、また図書館の協働相手としてアクターに加わる可能性が見えてきている。

以下、Ⅰ章では、実践科目「文章表現Ⅱ」の概要とねらい、授業内容の特色を述べる。Ⅱ章では、文章表現の科目で知的交流や知的好奇心を引き出すことを可能にした図書館および書店との協働について述べたあと、そのような授業の成果発表の機会が学生協働の萌芽となりつつあることを報告する。Ⅲ章では、「文章表現Ⅱ」の実践を振り返り、組織内外のアクターとの協働について考察する。

## Ⅰ. 実践科目「文章表現Ⅱ」の概要

### 1. 開講期間、受講者、クラス分け

本稿で報告する教育実践の対象科目は、2015、16年度の前期に開講された「文章表現Ⅱ」である。本学では、1年生前期はクォーター制となっており、6～7月の第2クォーターは、2コマ連続8週間(2単位)の基礎科目を選択して受講することになっていた。「文章表現」は、この第2クォーターの科目である。必修科目ではないが全員に強く受講を推奨している。

2015年度は、1年生全員に「文章表現Ⅰ」の受講を推奨し、「文章表現Ⅱ」は希望者のみ156名が受講した。「文章表現Ⅰ」は「論理的文章を書くための方法論やスキルといった知識を習得し、小論文やレポートといった論理的文章を作成する能力を養成する<sup>4)</sup>」ことを目的とし、「文章表現Ⅱ」は、「図書館の資料活用、アクティブラーニング、ピアラーニングを取り入れた講義を通して、学習成果物を外部に公開、発信することを想定した課題に取り組む」ことを目的とした<sup>5)</sup>。

2016年度は諸事情によりクラス数の確保が難しくなったため、「文章表現Ⅰ」または「Ⅱ」のどちらかの受講を推奨することになった。入学直後に実施する基礎力テストの国語の点数が高かった学生160名を「Ⅱ」に配置し、「Ⅰ」の学習内容を濃縮して学びつつ、15年度の「Ⅱ」とほぼ同様の学習内容を進めることになった。

### 2. 授業のねらいと内容

「文章表現」という科目の目的は、その名のとおり文章による表現力を向上させることである。「読み書き」はあらゆる学習活動の基本であるが、苦手意識のある学生が多い。しかも地味で面白くないという印象を持たれている。そこで、「文章表現Ⅱ」では、本稿冒頭で述べた知的交流の場をつくること、知的好奇心を引き出す機会をつくることを意識して、次の授業手法を採っている。1) 図書館の資料を活用した授業であること、2) アクティブラーニング、ピアラーニングを取り入れていること、3) 学習成果物を外部に公開、発信することを想定して課題に取り組むことである。2016年度はこれに、4) 地域の企業人との交流という新しい試みを導入した。具体的な授業内容については、表1を参照されたい。

1) の図書館資料の活用については、筆者のこれまでの論文でも詳細を公開しているとおり、図書館の資料（参考図書、新聞、雑誌、書籍、データベース）を探索し、おすすめの参考図書や雑誌記事、新聞記事を他者に紹介するという方法を採用している。このとき、教員から課題図書やお題は指示せず、あくまで受講生自身が探し出した「おすすめ」を紹介することにこだわっている。これは、自分の興味関心を自覚し、今後学んでいきたいと思う分野について考えるきっかけとなることを狙ったことである。

2) のアクティブラーニングについては、授業内での資料探索、ワークシートを提出する際の教員との対話、グループでの新聞づくり、POPの制作、グループでのディスカッション、グループ内またはクラス全体への口頭発表などの機会を設けている。このような体と口と手を動かして人と交流する学習活動は、大学、学部、学年を問わず好評である。

3) の外部への発信については、他者に読まれることを意識することで自分の文章に責任を持ち、内容や表現の質を上げようとするのがねらいである<sup>6)</sup>。具体的には、①新聞への意見文投稿、②図書館の書評コンテストへの応募、③POP等作品の学園祭での展示といった機会を作った。①の新聞への投書では、2015年度に一名の投書が神戸新聞に、16年度に一名が読売新聞に掲載されたことを確認できている。文章が評価され、新聞に掲載されたり、コンテストで入賞したりすると自信になる。そうした結果が出なくても、新聞に投稿してプロの編集者に読んでもらう、普段書かないような文章を何度も直しながら書き上げてコンテストに出すことは学生の大きな達成感を生む。その効果は大きい。②と③についてはⅡ章で詳しく報告する。

以上のように、「文章表現Ⅱ」は、自己の視点や意見を他者に伝え、また他者の視点や意見を知る機会を多く設け、それによって資料に対する理解を深め、能動的な「読み書き」を体験する授業であることが最大の特色である。そして、このような授業を実現するためには、図書館や学外者との協働が必要かつ効果的である。次章では協働の実践について報告する。

表1 2016年度「文章表現Ⅱ」授業の流れ（6～7月に2コマ連続で実施）

週	授業内容	本学図書館との協働	授業外での発信・ 学外者との協働
1	図書館探索、おすすめの参考図書 をみつける	図書館探索シートの開発	
2	おすすめの参考図書の紹介 おすすめの雑誌記事をみつける	参考図書の選定、雑誌利 用の際の支援等	
3	①ゲスト講義「読書のすすめ」 ②おすすめの雑誌記事の紹介		井戸書店・森忠延氏による読書に 関する講演（2016年6月21日） 前半：森氏による落語「読書の時 間」後半：森氏と担当教員（筆者） による対談と森氏の推薦本の紹介
4～5	おすすめの新聞記事の紹介、グル ープでオリジナル新聞を編集、プ レゼンテーション		完成したオリジナル新聞は学園祭 で展示（2016年は10月22～23 日に実施）
6	おすすめの新聞記事に関する意見 文の投稿		新聞への投書（15年に神戸新聞、 16年に読売新聞で各1名の掲載を 確認）
7～8	①「おすすめの一冊」書評作成 ②読書推進、書籍販促グッズ （POP、しおり、帯など）の作成	図書館主催の書評コンテ ストへの全員応募、POP の図書館での展示	学園祭での作品コンテストへの出 品（15年はPOPコンテストとし て開催、16年はPOP部門、しお り・帯部門を開設）
授業 終了後	①学園祭展示企画 ②図書館総合展ポスターセッシ ョンおよび全国学生協働サミットで の発表	学園祭での作品コンテス トへの支援、図書館賞、学 長賞の設立への支援	①学園祭での作品展示 ②第18回図書館総合展でのポス ター展示、第1回全国学生協働サ ミット参加および登壇

## Ⅱ. 図書館および書店との協働

### 1. 図書館との協働

本節では、図書館との協働による授業について述べる。まず「文章表現Ⅱ」では、開講すぐに図書館の資料を活用する機会を設けている。これは学生の知的好奇心を引き出すのに有効である。実施に当たっては図書館と事前に相談し、教材開発にあっている。

図書館との協働でもっとも目に見える成果を上げているのは、図書館主催の学生書評コンテストへの全員応募である。この取り組みのねらいは、担当教員以外の他者に読まれることを意識して文章を書く機会をつくることである。2015年度は「文章表現Ⅱ」受講者のなかから、最優秀賞、優秀賞1名(2名中)、佳作4名(7名中)の計6名、16年度は最優秀賞、優秀賞2名(3名中)、佳作5名(6名中)で計8名の受賞者を輩出することができた。

書評は達成感が大きいため、もっとも印象に残る授業内容だったと感想を記す学生が多いのだが、学生、教員双方の負担感もまた大きい。添削したものを学生に個別に助言しながら返却する際に待ち時間も生じる。そこで、POP やしおりなどの読書推進グッズの作成も並行して行っている。こちらは比較的楽しく取り組める課題でありながら、より短い言葉で人に伝える訓練にもなる。

POP の書式や作成ツールは指定していないが、ほとんどの学生はパワーポイントを使ってデザインする。宣伝文句は、書評文からもっとも伝えたい表現を抜いてくればよいので、時間はあまりかからない。ほとんどの学生はスムーズに楽しんで取り組んでいる。

授業で作成した POP やしおりなどの作品は、秋の学園祭で展示したあと、図書館に提供している。図書館では作品を館内に展示し、読書推進に活用している(写真1)。なお、2015年度の作品は、学園祭で展示した際に A4 サイズで印刷したものをラミネート加工した現物をそのまま提供した。2016年度の作品は、図書館が自由にサイズを加工できるようデータで提供している。

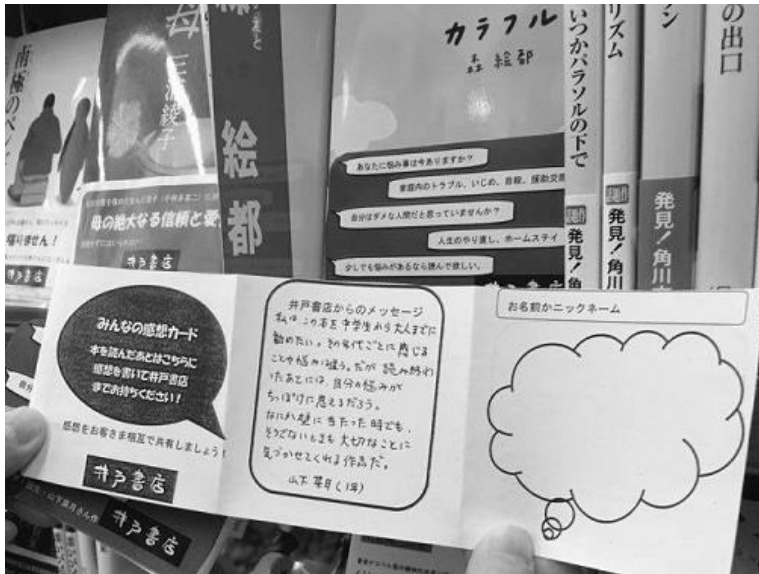


(写真1) 図書館2階に設けられた学生のPOPと書籍を展示したコーナー 2016年2月筆者撮影

## 2. 地域書店との協働

さて、2015年度の授業で学生が作成したオリジナル新聞やPOPは教員の予想以上に出来が良かったので、学園祭（10月24～25日）で展示することにした。オリジナル新聞は掲示のみにとどめたが、POPはコンテストを開き、来場者に一人一票を投じてもらい、上位7作品に賞状と副賞を授与した。このPOPコンテストが書店との協働を生むきっかけとなったのである。

2015年の学園祭での作品展示は、筆者が個人的にSNSで告知したほかは特別な広報や招待はしなかったが、筆者の友人からの案内で、別件で来学予定のあった井戸書店（神戸市須磨区）の森忠延氏（同社代表取締役、兵庫県書店商業組合専務理事）が展示を見学され、書籍の販促に使いたいPOPがあったと感想を伝えてくださった。そこで作品を一揃い持参してお礼に伺ったところ、一作品を同書店の商品の帯に加工し、店頭に並べていただけることになった（写真2）。



（写真2） 2015年度生・山下菜月さんのPOPを書店オリジナルの帯に加工していただいた(森絵都『カラフル』)。手前は購入者が感想を書いて次の購入者につなぐ「みんなの感想カード」。神戸市須磨区の井戸書店にて2015年11月20日筆者撮影

井戸書店は、本学から神戸市営地下鉄で4駅10分の板宿駅を出てすぐにある個人書店である。「我々は感動伝達人である」という経営理念を掲げ、森氏が選んだ書籍の紹介や自社の読書推進活動を自社ウェブサイト、Facebook、顧客への通信誌で頻繁に発信している。地域の人々の関心やニーズを考慮した特色ある本棚づくりや、子どものための論語塾や大人向けの読書会「人間塾」開催などの活動が評判を呼び、2015年の中小企業庁『地域課題を解決する中小企業・NPO法人100の取り組み』に選ばれている<sup>8)</sup>。

作品を持参した際、森氏が地域に根差した書店業を営むかわら、落語家としても活動をされていること、桂文枝の創作落語「読書の時間」をネタとして持っていることを伺い、落語の披露と講演を依頼した。講演内容は、森氏が2015年10月に「マイクロ・ライブラリーサミット2015<sup>9)</sup>」のオープニングセッションに登壇された際に話された内容を、筆者との対談で話していただく形にした<sup>10)</sup>。

ゲスト講義は、2016年6月21日の2限目、3限目に行った。16年度の「文章表現Ⅱ」は、筆者と桑原桃音講師がそれぞれ火曜の午前午後に2コマ続きで2クラスずつ担当していた。そのため、森氏には2セット同じ講義をしていただくことになった。落語「読書の時間」の披露に続き、井戸書店のさまざまな取り組み、読書の必要性、読書の効用、デジタルツールと本の違いについて話していただいた。学生との質疑応答の時間も設けた(写真3)。



(写真3) ゲスト講義「読書のすすめ」質疑応答の様子 2016年6月21日授業補助者撮影

この特別講義は、受講生や授業補助者(スチューデントアシスタント、SA)の2年生に大変好評を博した。最終回でとったアンケートでも、多くの学生がもっとも印象に残った授業内容に挙げた。受講生の声をごく一部であるが紹介する(原文ママ)。

#### 【森氏へのメッセージカードより】

- ・読書をする必要性について知ることができて良かったです。森さんが経営なさっている書店にまた立ち寄りしたいと思います。
- ・「本は心や脳への栄養分」という言葉を聞いて、自分も本をよく読むので、とても共感できるものがありました。

**【授業アンケートより】**

- ・落語を実際に聞いたり、外部の人の話を聞くことは新鮮で面白かった。
- ・大学で予想していなかった授業であり、落語も聞くことができ、さらに様々なおすすめの本の紹介もあって、非常に興味深かった。バラエティに富んだ内容で、飽きることなく楽しむことができた。
- ・話が非常に面白く、自分の価値観が変わったと感じた。
- ・特別感満載
- ・この科目だけで聞くのはもったいない。
- ・(新聞社へ意見を投稿したり) 講師の方を招いたりと大学の内だけでないところがよかったと思う。

**3. 学生協働へ**

以上のように、「文章表現Ⅱ」では、学生の知的好奇心を引き出し、他者との知的交流の機会をもつため、図書館との協働、地域の書店との協働を進めてきた。さらに 16 年度の授業終了後には、学生協働による活動を展開することもできた。有志学生が、学園祭と学外の催しで授業成果を発表し、活動終了後も本や図書館に関連する活動を継続したいという意思が芽生えてきたのである。

有志学生による授業成果の発表自体は、2015 年度の学園祭でも行ったのだが、このときはまだ教員主導による展示企画のお手伝いという段階にとどまっていた。2016 年度は学内の「教育実践推進費」に採択され、「文章表現Ⅱ」の独自の活動を展開する財源を得たので、学外での発表も可能になった。そこで授業終了時に希望者を募ったところ、6 名の 1 年生と SA の 2 年生 1 名が名乗りを上げた。1 年生は学部こそ同じ人間社会学部であったが、男女同数、一人は留学生と多様なメンバーが集まった。9 月末から彼らと教員 2 名で毎週集まり、学園祭展示と図書館総合展ポスターセッション出展の準備を進めた。学園祭では POP やしおり、帯などを展示し、コンテストを開いた。16 年度は図書館の支援を受けて、学長賞、図書館賞を設けることもできた。

学外での活動の舞台は、パシフィコ横浜で開催される第 18 回図書館総合展に定めた。図書館総合展は、図書館に関する日本最大規模のイベントである。2016 年は 11 月 8~10 日に開催され、来場者は 3 日間で 31,355 人にのぼった。

筆者がこの催しを選んだのは、規模が大きく、展示や催しものが多様性に富んでいること、出展者、来場者の属性も多様であることが理由である。特にポスターセッションは学術的な研究発表よりも活動紹介が多く、見せよう伝えようとする紙面づくりや接客に努めている団体が多く、「文章表現Ⅱ」の取り組みを学生主体で発表する場に適していると判断したのである。



ポスターのテーマは、「授業と図書館と書店の協働による読書推進教育の実践」とした。POP や学生の作った文庫本の帯など作品現物も展示した。学園祭の作品コンテストで入賞したしおりは、作成者の了解を得て印刷し、来場者に配布した。

有志学生は、自分たちでシフトを組んでポスター前に立ち、来場者に活動内容を説明した。図書館や企業、大学関係者など多様な大人や他大学の学生と接し、激励を受け、おおいに刺激を受けたようである（写真 4）。また同展に出展している企業等のブースをめぐる学生向けツアーに順に参加し、図書館に関連のある様々な業種、企業があることを知った。ある学生は次のように感想を記している。「今までは本に関する企業といったら出版社や書店のイメージが強かったが、このツアーを通して、いろんな本・図書にまつわる企業があり、それぞれが多くの方により快適に本を楽しめるように工夫を凝らしていると気づかされた」。

さらに、第 18 回から創設された「第 1 回全国学生協働サミット」にも「メンバー」として参加することになった。これは学生と図書館の協働について全国の大学生が活動を報告し、交流するという企画である。40 大学が参加を表明し、2~300 人収容可能なスペースに立ち見が出る盛会のなか、本学学生の代表者も登壇して、「授業と図書館と地域のコラボレーション」と題して活動報告をする機会を得た（写真 5）。

学外に出て刺激を受けてほしい、多様な人と交流をもってほしいという狙いは期待以上の効果をもたらした。参加した学生から、今後も本や図書館に関わる活動を継続したい、「文章表現Ⅱ」の授業運営にも関わりたいという熱い要望を受けることになったのである。有志の学生たちの活動報告書から抜粋して紹介する（原文ママ）。

- ・（活動に参加したのは）授業を通して本が改めて好きになったからだ。また、展示の活動を通してもっと本の魅力を多くの人に発信していき、私のように本が好きになる人が 1 人でも増えてほしいと思った。
- ・ポスターセッションでは、他大学はサークル活動などの一環でやっているところが多くあったため、授業として出展しているというところで驚かれた。そして、他大学の展示を見ていると、様々な人目を惹く工夫がなされていたため素晴らしいと思った。また、他大学の教授や、書店を営まれている方などから貴重な意見を聞くことができて良かったと思う。
- ・大学の授業と説明すると、驚かれる方や感心してくださる方が多かった。また、学生の方からは「こんな授業いいな」という声もあり同じ学生として嬉しく思った。
- ・皆一生懸命ポスターを作るのに頑張っていて、私も巻き込んで、外国人でも仲間扱いしてくれてとても素晴らしい人ばかりだった。チームワークがすごく本当によい経験になった。信頼できる人が増えて、皆ともっといろいろに頑張りたいと思った。横浜の総合展にもっと参加できた

ら行きたいし、このグループであればこの学校で図書館にかかわる活動もやってみたいとおもう。(イタリアからの留学生)

- ・総合展などの活動を通して知ったことを大学の図書の活動に活かすことができたらと思う。今年の夏に図書館がリニューアルされてますます快適な空間になっているので、もっと利用者数が増えるようにPRなどもしていきたい。リニューアルされてから図書館に足を運んでいない人を多く見かけるので、新たに行きたいと思えるような機会やイベントを作るといいと思う。簡単な例を挙げるならば、ビブリオバトルやしおり・帯づくり(実際に作ったものを展示)などができそうだと思う。また、関西にも読書の促進を行っている大学があったので共同で何かしたい。
- ・(今後したいこと、できること) 他大学・図書館との交流、プレゼンテーション大会などに参加、来年の授業の授業内容プラン思考及びプラン作成
- ・来年度も授業の運営や学園祭、図書館総合展の展示に携わりたい。
- ・学内でビブリオバトルを開きたい。活動に賛同し、協力してくれる後輩を増やし、後進を育成していきたい。



(写真4) 第18回図書館総合展ポスターセッションの様子 (写真5) 全国学生協働サミットの様子  
どちらもパシフィコ横浜にて2016年11月8、10日筆者撮影

### Ⅲ. 協働による授業づくりに関する考察

以上、「文章表現Ⅱ」の2015～16年度の取り組みについて報告した。ここでもう一度、同科目の特色をまとめておくと、1年生前期の8週のみ開講の「文章表現」という基礎技能を習得するための科目において、知的交流の機会をつくり、知的好奇心を引き出すため、アクティブラーニング主体の授業を行っていること、そのような実践を可能にするため、図書館や書店という学内

外の他組織と協働していること、授業期間が終了したあとに自由参加の活動として学生による学習成果発表を行っていること、その活動を通じて学生協働の芽生えが見られたことである。

ここであらためて本稿の主眼である「協働」について考えたい。「協働 (collaboration)」とは、坂本 (2008) によれば、日本の地方自治の世界では 1990 年代の初めごろから使われだした用語で、立場の異なる個人や組織が対等な立場で一つの目標を共有し、共同事業を行うこととまとめることができる<sup>11)</sup>。

松下 (2002) は、自治体と NPO のパートナーシップを論じるなかで、「協働」を「対等な関係を基本としつつ共同事業を行うという行為・行動に着目した言葉」と表現する。自治体と NPO にはそれぞれ独自に活動する領域と、両方が活動する領域がある。両者が活動する領域のなかでも、対等に協力、協調する場合が協働という表現に最もぴったりすると言う<sup>12)</sup>。

高等教育の場においても協働という用語は昨今頻繁に使われている。学術論文データベース CiNii で「地域\_\_大学\_\_協働」と検索すると、2 千件あまりの論文がヒットする。このうち大学の授業あるいは事業として、地域と関わって何らかの活動をしている例を拾っていくと、商店街活性化などの地元産業支援や、保健医療衛生分野での専門知識と技術の提供、初等・中等教育機関と大学との実験的な授業の事例が多くみつかるといえる。その主な目的は、「地域の問題解決」「社会貢献」「学生の社会体験」である。これらの活動はたしかに社会的な意義があり、大学の存在価値を高め、学生のキャリア支援にもつながるのであるが、大学が供与・貢献する側、地域が受け手という関係性が色濃く見られることは気になる点である。また、「協働」そのものが目的化しているような実践も見受けられるのは見過ごせない。

本稿で報告した取り組みは、「社会連携」「地域協働」「産学連携」「教職協働」を実施するために企画したわけではない。「文章表現Ⅱ」の 8 週の授業は、あくまで、学生が読み書きまとめ、伝える力をつけることが第一義であって、「協働すること」「協働体験」そのものが目的ではない<sup>13)</sup>。これは、図書館や地域書店にしても同じである。図書館も書店も、正規授業と「協働」するために何かを企画しようとしたわけではない。授業担当者、図書館、書店の三者が「学生にもっと本を読んでほしい」「学生の読む力、書く力を伸ばしたい」という目的で一致し、そのために最適な活動を模索した結果の協働である。ゲスト講義を開いたり、コンテストに応募したり、イベントに参加したりといった「ハレ」の場を創出したのはその目的を強く印象づけるためである。

授業終了後の活動に携わった学生が、今後も本や図書館に関わる活動を継続したい、拡大したい、「文章表現Ⅱ」の授業にも関わりたいと要望を出してきたことは、この協働による授業の大きな成果の一つであると言えよう。次は、彼らも交えた授業を展開していければと考えている。

## 注、引用文献

- 1) 橋本信子：「大阪商業大学初年次教育科目におけるライティング指導の実践」『大阪商業大学論集』（2012），166，71-80.
- 2) 橋本信子：「能動的学習を促すための知的交流の場を作る取り組み」『大阪商業大学論集』（2013），170，101-115.
- 3) 図書館の資料を活用して行った教育実践については以下を参照。橋本信子：「アカデミック・スキル科目における主体性の引き出し方の工夫 「基礎演習Ⅱ」「学習リテラシーⅠ・Ⅱ」における取り組み」『平成24～25年度大阪商業大学教育活動奨励助成費報告書 一学生の参加意欲を喚起する授業方法に関する研究・実践一』（2014）4-27，同：「学生の知的好奇心を引き出す授業実践 大阪商業大学における「おすすめ」を紹介するプログラム」『大阪商業大学論集』174，（2014）15-28，同：「授業と図書館の協働 一初年次教育科目における連携を中心に一」『流通科学大学論集』28（2）（2016）93-106.
- 4) 本学の初年次教育における「文章表現」科目の位置づけと、「文章表現Ⅰ」の教育実践については、藤田里実、山下香、西川真理子、石黒太：「アクティブラーニングを用いた文章表現教育の効果 一文章形成と文章への接触に対する抵抗感の変化に着目して一」『高等教育推進センター紀要』2，（2017）を参照されたい。
- 5) 「文章表現Ⅱ」は筆者と桑原桃音専任講師が担当した。2015年度はそれぞれ4クラス計8クラス開講であった。16年度は2クラスずつ計4クラスを開講した。桑原講師とは期間中、授業観察、合同授業によるリフレクションを継続し、授業内容や指導法、評価基準の平準化をはかった。その実践は、橋本信子、桑原桃音：「授業観察と合同授業による授業リフレクションの実践 一日常的、継続的、効果的なFDの取り組み一」『高等教育推進センター紀要』1，（2016），65-78 で報告している。
- 6) 注1の橋本(2012)に同じ。
- 7) 図書館を使った授業への図書館による支援は、注3の橋本の実践論文を参照されたい。
- 8) 中小企業庁 <http://www.chusho.meti.go.jp/pamphlet/hakusyo/H27/PDF/150617jirei2.pdf>（2016年12月12日確認）。次の書籍にも井戸書店と森氏の紹介が掲載されている。神戸新聞社編『兵庫人 輝く』（神戸新聞総合出版センター 2013），407-408，洋泉社MOOK『本屋はおもしろい！！』（洋泉社 2014），69.
- 9) マイクロ・ライブラリーサミット2015は、2015年10月3日に、まちライブラリー@大阪府立大学にて開催された。マイクロ・ライブラリーとは、「公共図書館、大学図書館などの公的なものではなく個人の力や思いでつくられた私設図書館」を指す。マイクロ・ライブラリーサミットは、「私設図書館のオーナーや運営に携わる人々が登壇し、ライブラリーの立ち上げや運営、アクティビティの開催など日頃の取り組みを紹介し、ライブラリー活動にかける想いを共有し、新たな活動のヒントを得、また、課題を克服する場」である。第4回マイクロ・ライブラリーサミット参加募集ページより。  
<http://machi-library.org/event/detail/2624/>（2016年12月12日確認）。
- 10) 同サミットの記録は書籍で出版されている。磯井純充、奥野武俊、森忠延、吉成信夫他『コミュニティとマイクロ・ライブラリー』（一般社団法人まちライブラリー 2016） この書籍の出版記念イベントとして、森氏と共著者の磯井純充氏が井戸書店でトークセッションを開催した（2016年5月4日開催）。森氏のゲスト講義の対談は、このときのトークセッションを踏襲したものである。
- 11) 坂本旬：「「協働学習」とは何か」『生涯学習とキャリアデザイン』5，（2008）50.
- 12) 松下啓一：『新しい公共と自治体』（信山社 2002），36-38.
- 13) その意味では、注11に引いた坂本(2008)は逆の主張である。坂本の論文は、「「協働学習」は学習課題達成の手段として「協働」を用いるのではなく、「協働」そのものに「教育的価値」を見だし、教育活動に取り入れるべき学習方法である。」56 と主張する。ただし、ここでは「学習者」が異質な背景を持つ者同士であることを論じているのであって、授業をつくるうえで立場の違うものが協働するのは別問題である。

謝辞：本稿は、2016年度流通科学大学教育実践推進費（課題名：「授業と図書館と地域の協働による読書推進教育の実践」代表：橋本，共同研究者：桑原桃音商学部特任講師）の助成を受けた教育活動の成果報告の一部である。